



新刊案内 ～読んでみました～

長尾和宏著

『小説「安楽死特区」』

(ブックマン社)

2024年、日本で「安楽死法案」可決!?

『信長公記』によれば、清洲城の織田信長は桶狭間の戦いの前夜、今川義元尾張張攻の報を受け、「敦盛」の一節を誦しながら舞い、立ったまま湯漬を食したあと甲冑を着けて出陣したという。曰く、「人間五十年下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり。一度生を得て滅せぬ者あるべきか」。これは室町時代に流行した曲舞「幸若舞」の一節である。桶狭間の戦いがあったのは永禄3年(1560年)のこと。この時代の日本人男性の寿命が50歳であったかどうかは定かではないが、少なくとも男性の厄年の最高齢が数えて61歳というところを見ると、昨今の「働き方改革」等で標榜されている65歳が現役の働き手として社会進出するようになったのはそんなに古い話ではないはずだ。

因みに日本人の平均寿命は厚生労働省の「日本人の平均余命・平成16年簡易生命表」によると昭和22年(1947年)で男性が50・06歳、女性が53・96歳となっている。ところが昭和60年(1985年)になると男性が74・78歳、女性が80・48歳と、飛躍的に伸び、平成25年(2013)には男性の平均寿命も80・21歳(女性は87・14歳)となり、とうとう男女そろって80歳を超えた。

どんなに長寿大国になっても、いずれは誰でも死の時を迎える。本誌に連載「医療最前線」を執筆いただいている長尾和宏氏は、「自身が現役のドクターとして患者に向き合う中、在宅医療のあり方や、自宅で迎える「死」についての「執筆も多いお方である。

その長尾氏が書き下ろされた小説「安楽死特区」は近未来社会における「人間」と「死」に目を向けた物語である。2024年、日本で「安楽死法案」可決されたという想定のもと、登場人物は、それぞれの置かれた状況の中で人生を見つめ、そして死と対峙する。安楽死が公然と認められないのなら実験的に「特区」を設けるという設定で、死と向き合うとする人物像を浮かび上がらせる長尾氏の筆は、時に優しく、時に冷徹である。

しかしながら、その底流に流れる長年「死」と向き合い、常に患者に寄り添ってきた医師の視線は、限りなく深く優しい。多くの人は死と向き合う時、常に割り切れない何かを抱えているのではないだろうか。その割りきれなさをそのまま抗うことなく割り切れないと描く所作に著者の優しさがにじみ出る。死を見つめるとき、宗教にすがったり、自棄的になったり、ヒトは様々な行動を取る。そこに

立ちほだかるのが法律であり倫理観であり、そして文化であったりするのだ。著者は、こう語る。

◆ 死にたい、と願うのはエゴですか？
生きていて、と望むのは愛ですか？

◆ このころ、「早く日本でも安楽死を認めてほしい」という人が増えた。
その先にどんな未来が待ち受けているのか、書きたかった。

◆ 安楽死は自殺なのか。それを手助けする医師は自殺補助にあたるのか。そして、死を避けられない状況にある人間の尊厳死はどうか。

◆ 本書に登場するのは女流作家、心臓外科医、旅行写真家、歌舞伎町の熟年ホスト、元東京都知事の女性などなど。それぞれの人物が織り成す悲喜こももものストーリーが展開する中で、その行間に埋め込まれている著者の思いは常に死を迎えようとする人々に寄り添うように見える。

◆ この本が小説という形態をとったのは、恐らく「死」というテーマをドキュメントとして伝えることの難しさ故なのではないだろうか。

◆ 仇や疎かに語られることを忌避される「死」というテーマに、真っ向から向き合うことができたのは、医師として幾多の「死」を見つめ、そのことを問い続けてきた著者だからこそだろう。

◆ アマゾンの文芸部門で1位となった本書は総合でも11位となり、数多くの著書を持つ著者のベストセラーの1冊となった。

◆ ここで語られているのは、いずれ誰もが迎えることになる「死」の質を問う物語である。そして死の質を問うことは、人生の質を問うことにほかならないのではないだろうか。

◆ 「どう生きるのか」を問うことは「どう死ぬのか」を問うことに繋がるのだ。
◆ 本書を小説として、物語として面白おかしく読むことはもちろんそれで良いのだが、いずれ誰もが迎える事になる「死」と、そこに繋がる「人生」を見つめ直す縁となる「種の哲学書としての側面を見た気がする。



2024年、日本で「安楽死法案」が可決した。東京オリンピックが終わり、疲弊してゆくわが国で、病を抱え死を願う男と女が、国家の罨に堕ちてゆく…ベストセラー医師による、初の本格医療小説！

